

shikagaku

生物多様性モニタリング プロトコール集

3



生物系教員ネットワーク (shikagaku)

2014 (平成26) 年3月

表紙写真の説明

左：カヤネズミの球巣（船越 公威 撮影）

右上：クロフジツボとイワフジツボ（山本 智子 撮影）

右下：校舎で拾った昆虫を調査する教員

（2013年博物館フィールドワーカー養成講座：金井 賢一 撮影）

2011年に鹿児島県生物教員等ネットワークが発足してから3年が経過しました。MLにはメンバーの近況、催物の案内、出版物の紹介等が随分送られ、新規加入もそこそこあり、情報交換の場としてはまずまず機能しているのではないかと思います。それだけでも存在価値はあるかなと思います。しかし、shikagakuがかかっている大目標(?)である生物多様性のモニタリングがどこまで進んだかといわれると、ウーンと頭を抱えてしまいます。

そもその問題意識は、いろいろな生物の盛衰が非常に感覚的にとらえられていて、なかなか客観的に示せない、そこをもう少ししっかりしたデータで示せないか、というところがありました。ある昆虫の種は増えているのか、減っているのか絶滅しかけているのか。ある場所の生態系は単純化しているのか、そうでないのか。それらを判断するためには特定の種や分類群あるいは、特定の場所を長期にわたってモニターするしかない、ということでした。これを本格的にやるとすれば、難しい生態学の研究になってしまいます。

学校の教師や自然に関心をもつ社会人は研究のためのまとまった時間がとれません。高度な方法論も持っていません。それでも何かできないか、と考えたとき思い浮かんだのが「時間をかけず、誰にでもできる調査プロトコルの開発」でした。これはおそらく誰もが考えてきたことでしょう。ただ、なかなか大きなうねりにならず、何度も試みては挫折してきたことなんだと思います。

それでもとにかく、プロトコル集を No.2 まで出して、誰かが動き出すのではないかと期待してきました。しかし、やはりそう簡単なことではないことがまたもや明らかとなりました。一つはきっかけです。やりたいと感じた人が現れたとき、まずはプロトコル提案者が現地に行って、一度は手ほどきをせねばなりません。提案者にとってどんなに簡単な手順でも、初めて試みる人にとってはとてつもなく難しいのです。ちょっとしたコツを知るだけで、やれる自信がつきます。

比較的少ない努力でも、こつこつとデータを集めることによって、何かが見えてくる、という実感をえるには、やはり体験を積んだ人のアドバイスが必要です。在野のナチュラリスト、中高校の生物系教員と生徒、大学教員が協力してどのような成果を生み出せるか、ためされています。今回も大変面白いプロトコルが提案されています。これらがなんとか生かされて、データが蓄積されていくことを願っています。また、面白い提案が次々と出てくることを期待しています。 (山根・金井)

生物多様性モニタリング

プロトコール集 3

2014年3月25日

発行：鹿児島県生物教員等ネットワーク  
事務局

892-0853 鹿児島市城山町 1-1

鹿児島県立博物館 金井賢一

890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35

鹿児島大学理学部 富山清升

## 目 次

前書き	．．． 1
PR-09 野生動物の痕跡を探そう —意外に身近にいる野生動物たち—	．．． 2
PR-10 人工構造物の付着生物を調べよう	．．． 15
PR-11 校舎に飛び込む虫を調べよう	．．． 26